原 著

中学生の怒り喚起場面における対処行動に関する研究

岩手県立大学 藤井 義久

A study of coping behavior in the anger situation among junior high school students

Yoshihisa Fujii

Iwate Prefectural University, Takizawa, Iwate 020-0193

The purpose of this study was to analyze the coping behavior in the anger situation. The subjects were 312 junior high school students.

First, an Anger Coping Inventory for junior high school students (pilot version) was constructed by an open answer questionnaire. Factor analysis suggested that anger coping behavior consisted of three factors: attack, help, and suppression. Only the help behavior score differed significantly between genders (female > male). Moreover, the higher the anger frequency and the higher the stress level, the more frequently attack behavior was adopted in confrontational scenes. Multiple regression analysis was then conducted to determine the relationship between the anger scale and coping behavior in situations of expressed anger. Results suggested that males tended to show attack behavior when faced with dissatisfaction, whereas females tended to show suppression behavior. Finally, males tended to adopt help behavior in confrontational situations caused by friends, whereas females adopted attack behavior in confrontational situations caused by teachers.

Key Words: Anger Coping Inventory, coping behavior, anger, attack, suppression

最近、特に中学校において、突然、キレる子供達が増えてきていると言われている(斉藤, 1999)。「キレる」という現象は、中学生がストレス場面に遭遇した時に用いる不適切な対処行動の1つとして捉えることができる。

さて、Lazarus & Folkman (1984) は、日常生活において頻繁に経験される様々ないらいだち事(Daily Hassles)をストレッサーとして最重要視した。そして、ストレッサーを受け止める個人内の要因に目を向けたストレス過程を提唱した。その中で、個人がストレス状況においてどのような対処行動を行うかが、後の心理的過程やストレス反応の表出を決定すると述べている。同様に、Pearlin & Schooler(1978)やParks(1984)の研究においても、個人がストレッサー

に対して行う対処行動は、ストレス反応の表出を規定する重要な媒介変数であることを明らかにしている。Folkman et al(1986)や小杉(1996)は、対処行動を「個人と環境との相互的やりとりの結果、個人の資質を脅かすと判断された場合に個人が取る認知的行動的努力」と定義している。そしてこの定義に基づき、ストレス状況における個人の対処行動に関する研究は、盛んに行われている現状である(Folkman & Lazarus, 1985; Zeiner & Hammer, 1990; 山口ら, 1994; 山口ら, 1996)。一般に、ストレス場面における人間の対処行動を分析していく場合、Folkman & Lazarus (1985) や神村ら (1995) が述べているように、「問題に対して積極的に関わる」、「問題ではなく情緒の安定を志向する」、「問題を回避

する」という3つの次元から見ていくことが望ましいと考えられる。

また、近年、学校ストレスに対する児童生徒の対処行動に関する研究も行われるようになってきた。例えば、三浦ら（1997）は、最近あった「いやな出来事」に対して行った行動の視点から、中学生の学校ストレス場面における対処行動を測定できる「中学生用コーピング測定尺度」を開発している。この尺度は、「積極的対処」（例：問題の原因を取り除くよう努力する）、「サポート希求」（例：自分の置かれた状況を人に聞いてもらう）、および「認知的対処」（例：どうしようもないのであきらめる）という3つの下位尺度、計30項目から成っている。ただ、岡安ら（1992）の研究でも明らかなように、中学生のストレス反応は多次元的に捉えておく必要があると言える。したがって、三浦ら（1997）の尺度のように、「いやな出来事」と言っても、ストレス反応の1つと考えられる怒りを生じさせる出来事を指しているのか、不安を生じさせる出来事を指しているのか、回答者によって捉え方が異なることが予想される。つまり、ストレス場面の種類によって個人の対処行動様式も自ずから変わってくると思われる。したがって、ストレス場面における個人の対処行動を分析する場合、ある程度、場面を限定して測定することが必要である。

そこで、本研究では、突然、キレる子供達が増えて対応に苦慮している学校が多い現状から、ストレス場面の1つと考えられる「怒り喚起場面」に限定して、中学生の怒り対処行動を分析するとともに、怒り水準と怒り対処行動との関連性について分析することにした。なお、藤井（2001）の研究でも明らかなように、怒りとストレスとは、密接な関連のあることが広く知られている。

さて、我が国においては、怒り喚起場面における対処行動の測定を目的とした尺度は、未だ存在しない。しかし、諸外国においては、怒り喚起場面における対処行動の1つの様式と考えられる「怒り表現の方法」の視点から、怒り対

処行動を測定できる尺度が、すでに開発されている。例えば、Harburg et al（1973）は、怒り喚起場面においてどのように怒りを表現するかという質問紙を開発し、怒りを抑圧する人はそうでない人よりも血圧値の高いことを明らかにした。また、Spielberger et al（1985）は、怒り喚起場面において怒りを内に抑える「抑制」（anger in）に関する8項目、怒りを外に出す「表出」（anger out）に関する8項目、表出できない怒りを発散処理する反応である「制御」（anger control）に関する8項目、計24項目から成る Anger Expression Scaleを開発している。しかし、怒り喚起場面における中学生の対処行動は、単に怒りを表出するか、抑制するかといった1つの次元だけで測定できるものではないと考えられる。すなわち、怒りの「表出」、「抑制」以外にも、怒り喚起場面における人間の対処行動様式は存在すると考えられる。また、発達段階によっても、対処行動様式も異なってくることが考えられる。

そこで、本研究では、中学生の怒り喚起場面における対処行動に関する自由記述調査結果をもとにして、「中学生版怒り対処尺度」を開発することにした。

方 法

尺度項目の収集 岩手県内のM中学校の生徒（1～3年生）95名を対象にして、怒り対処行動に関する自由記述調査を実施した。具体的には、「あなたは友達にいやなことをされて腹が立った時、どういった行動を取りますか」という質問をして、自由に記述してもらう方式で調査を行った。本自由記述調査において、「友達にいやなことをされて腹が立った場面」に限定して項目収集を行った理由は2つある。第1の理由は、中学生という発達段階を考えると、ある程度、具体的な怒り喚起場面を提示しないと回答しにくいと考えられるからである。第2の理由は、藤井（2001）が行った中学生に対する調査の結果、友達にいやなことをされた時、最も怒りやすい傾向が見られたからである。そして、自由

記述調査で得られた項目について、整理及び修正が行われ、最終的に32項目を「中学生版怒り対処尺度(Anger Coping Scale for Junior High School Students)」、略してACS-Jの項目として用いることに決めた。なお回答方式は、友達にいやなことをされて腹が立った時に以下のような行動を取りましたか」という質問に対して、「しない」を1、「ときどきする」を2、「よくする」を3とする3件法とした。

調査対象者 岩手県内の公立中学校3校の生徒312名(男子160名、女子152名)を対象とした。内訳は、1年生115名(男子62名、女子53名)、2年生99名(男子44名、女子55名)、3年生98名(男子54名、女子44名)であった。

手続き 担任によって授業時間内に質問紙を配布し、一斉に回答を求め、回答終了後、直ちに回収した。なお質問紙は、前述の手続きにより作成されたACS-J、藤井(2001)が開発した「中学生版怒り尺度」、日常生活における怒り頻度およびストレス度に対する自己評価(3段階)に関する調査項目から構成されている。なお、Table 1に、「友達関係」、「親子関係」、「欲求不満」、「教師関係」という4つの下位尺度から成る「中学生版怒り尺度」の項目例を示した。この尺度の特徴は、様々な場面ごとの怒り水準を4段階(全く腹が立たない—とても腹が立つ)で測定するところである。

Table 1 中学生版怒り尺度の項目例

I 友達関係(8項目)	
・	友達に悪口を言われた時
・	友達に無視された時
II 親子関係(6項目)	
・	親にしつこく注意される時
・	親に叱られた時
III 欲求不満(7項目)	
・	テストの出来がよくなかった時
・	覚えたことがなかなか思い出せない時
IV 教師関係(5項目)	
・	先生が自分の言うことをわかってくれない時
・	頼んでいるのに、先生が何もしてくれない時

藤井(2001)

結果と考察

尺度項目の検討 ACS-Jの各項目に対して0点(しない)から2点(よくする)という得点を与え、項目得点の平均値及び標準偏差を算出した。そして、各項目得点が0点～2点であるので、四分領域の視点から項目得点が0.50未満という明らかに得点の低い9項目を削除した。

次に、因子的妥当性を検討するために、因子分析を行った。まず平均値の低かった9項目を除く23項目を用いて、最尤法による因子分析を行ったところ、3項目の共通性が、.20未満と低かったため、以降の分析対象から外すことにした。

そして、残った20項目について、再度最尤法による因子分析を行った。なお、分析に当たっては、統計パッケージのSASを用いた。その結果、著しく共通性の低い項目や2つ以上の因子に高い因子負荷の見られる項目はなかったため、これら20項目について解釈を行ったところ、説明分散および因子負荷パターンより3因子解が妥当であると判断された。なお、男女間の因子構造の違いについて分析したが、男女間で因子構造の差は見られなかったため、男女込みにした本因子分析結果を採用することにした。

プロマックス回転後の因子負荷量をTable 2に示す。まず、第1因子は、「仕返しをする」、「にらみつける」といったように、攻撃行動に関する項目の負荷量が高かったため、「攻撃因子」と命名した。第2因子は、「誰かに相談する」、「友達に話を聞いてもらう」といったように、援助行動に関する項目の負荷量が高かったため、「援助因子」と命名した。第3因子は、「だまっている」、「じっと我慢する」といったように、抑制行動に関する項目の負荷量が高かったため、「抑制因子」と命名した。なお、それらの因子間相関もTable 2に示した。そして、「攻撃因子」の負荷量の高かった7項目によって構成される尺度を「攻撃尺度」、「援助因子」の負荷量が高かった6項目を「援助尺度」、「抑制因子」の負荷量が高かった7項目によって構成される尺度を「抑制尺度」、前述の3つの下位尺度の計20項目によ

Table 2 怒り対処項目の因子分析結果（プロマックス回転）

項 目 内 容	M	SD	因子 1	因子 2	因子 3	共通性
仕返しをする	0.72	0.76	.70	.03	-.29	.52
にらみつける	0.71	0.76	.67	.14	-.11	.46
口で言い返す	1.08	0.77	.62	.07	-.23	.40
相手をたたく	0.55	0.70	.62	-.21	-.22	.47
壁や机をたたく	0.60	0.78	.60	.03	.12	.41
近くにある物を投げる	0.61	0.78	.56	.09	.04	.33
大声で叫ぶ	0.41	0.70	.50	.29	-.06	.32
誰かに相談する	0.97	0.70	-.03	.80	-.02	.66
友達に話を聞いてもらう	1.04	0.77	.10	.76	-.02	.58
友達に助けを求める	0.71	0.69	.19	.72	-.01	.53
お母さんやお父さんに腹の立ったことを話す	0.65	0.75	-.06	.59	-.01	.36
自分の気持ちを友達に伝える	0.60	0.68	.20	.52	-.16	.30
思いっきり泣く	0.43	0.70	-.02	.48	.29	.25
だまっている	1.01	0.78	-.31	-.13	.71	.54
じっと我慢する	0.68	0.75	-.14	-.04	.62	.38
腹の立っている気持ちを相手に知られないようにする	0.61	0.69	-.04	-.13	.61	.39
腹の立つ気持ちを何とか抑えようとする	0.94	0.77	-.13	-.03	.55	.30
いつもより早く寝る	0.42	0.66	.18	.26	.46	.25
気にしないようにする	1.05	0.77	-.07	.05	.47	.24
趣味に没頭する	0.73	0.80	.22	.12	.40	.21
寄 与 率 (%)			16.06	12.96	9.84	
因 子 間 相 関	因子 1		1.00			
	因子 2		.17*	1.00		
	因子 3		.04	.20**	1.00	

* $p < .05$, ** $p < .01$

て構成される尺度を最終的にACS-Jと命名した。なお、Cronbackの α 係数を算出したところ、攻撃尺度は.66、援助尺度は.64、抑圧尺度は.72であった。

対処行動の性差及び学年差 怒り喚起場面における対処行動の性差及び学年差を検討するために、ACS-Jの下位尺度得点をもとにして、分散分析（性×学年）を行った。なお、下位尺度得点は、それぞれの下位尺度を構成している項目の得点を単純に加算する方式で求められた。したがって「攻撃尺度」と「抑制尺度」についてはともに最低点0点、最高点14点、「援助尺度」については最低点0点、最高点16点、ACS-J全体では最低点0点、最高点40点となる。その分散分析結果をTable 3に示す。それによると、援助尺度得点の性差及び学年差においてのみ有意であった。すなわち、女子の方が怒り喚起場面

において誰かに援助を求める傾向が有意($F(1, 310) = 96.87, p < .001$)に強かった。また、援助尺度得点の学年にも有意な主効果($F(2, 309) = 5.35, p < .05$)が見られたので、Tukeyの多重比較を行ったところ、5%水準で3年生の援助尺度得点が2年生以下よりも有意に高いことがわかった。つまり、高学年ほど怒り喚起場面において援助を求める傾向の強いことがわかった。それ以外の下位尺度においては、性差、学年差、交互作用とも有意ではなかった。

対処行動と怒り頻度との関連 中学生が怒り喚起場面において取る対処行動と怒り頻度の関連性について検討するために、ACS-Jの各下位尺度ごとに、対処得点を目的変数、怒り頻度を説明変数として、1要因分散分析を行った。なお、怒り頻度の回答方式は、「あなたは日常生活においてカッとなることがありますか」という

Table 3 怒り対処得点の学年別男女別平均値及び分散分析結果

下位尺度	性別	1年生	2年生	3年生	F 値		
					性 差	学年差	交互作用
I 攻撃	男	4.95(3.17)	4.68(3.29)	5.22(3.39)	2.54	0.54	0.00
	女	4.26(3.22)	4.31(3.21)	4.61(3.23)			
II 援助	男	2.77(2.24)	2.66(1.98)	3.72(2.67)	96.87***	5.35*	1.31
	女	5.19(2.66)	5.78(2.57)	6.55(2.48)			
III 抑圧	男	4.85(2.68)	5.27(2.96)	5.57(2.94)	2.06	0.97	0.36
	女	5.49(2.68)	5.91(2.61)	5.57(2.85)			

() は標準偏差

*** $p<.001$, * $p<.05$

質問に対して、「全くない」、「ときどきある」、「よくある」という3件法である。Table 4に、怒り頻度別怒り対処得点の平均値および分散分析結果を示す。その結果、攻撃尺度のみ有意($F(2, 309) = 6.24, p<.01$)であった。そこで、Tukeyの多重比較を行ったところ、怒り頻度—高群が中群以下よりも、5%水準で有意に攻撃得点の高いことがわかった。このことから、日常生活においてより怒りやすい生徒ほど、怒り喚起場面において有意に攻撃行動を取る傾向の強いことが明らかになった。

対処行動とストレス度との関連 中学生が怒り喚起場面において取る対処行動と日常生活において感じているストレス度の関連性について検討するために、ACS-Jの各下位尺度ごとに、対処得点を目的変数、ストレス度を説明変数と

して、1要因分散分析を行った。なお、ストレス度の回答方式は、「あなたは、今、ストレスがたまっていますか」という質問に対して、「全くたまっていない」、「少したまっている」、「とてもたまっている」という3件法である。Table 5に、ストレス水準別怒り対処得点の平均値及び分散分析結果を示す。その結果、前述の怒り頻度と同様に、攻撃尺度のみ有意($F(2, 309) = 6.24, p<.01$)であった。さらに、Tukeyの多重比較を行った結果、5%水準でストレス高群がストレス中群以下よりも攻撃行動得点の高いことが明らかになった。すなわち、日常生活においてストレスがたまっていると感じている生徒ほど、怒り喚起場面で攻撃行動を取る傾向の強いことがわかった。

対処行動と怒り水準の関連 ACS-Jの各下位

Table 4 怒り頻度別怒り対処得点の平均値及び分散分析結果

下位尺度	怒 り 頻 度			F 値
	低 (n=60)	中 (n=207)	高 (n=45)	
I 攻撃	3.90 (3.03)	4.60 (3.24)	6.09 (3.18)	6.24**
II 援助	4.10 (2.79)	4.57 (2.87)	3.98 (2.71)	1.21
III 抑圧	5.98 (3.07)	5.34 (2.66)	5.11 (2.89)	1.59

** $p<.01$

Table 5 ストレス水準別怒り対処得点の平均値及び分散分析結果

下位尺度	ス ト レ ス 度			F 値
	低 (n=57)	中 (n=185)	高 (n=70)	
I 攻撃	3.90 (3.03)	4.60 (3.24)	6.09 (3.18)	6.24**
II 援助	4.10 (2.79)	4.57 (2.87)	3.98 (2.71)	1.21
III 抑圧	5.98 (3.07)	5.34 (2.66)	5.11 (2.89)	1.59

** $p<.01$

Table 6 怒り反応から怒り対処行動への重回帰分析結果

	男 子			女 子		
	攻 撃	援 助	抑 圧	攻 撃	援 助	抑 圧
友達関係	-.06	.15*	-.08	-.01	.10	-.10
欲求不満	.23**	.01	.12	.04	.09	.15*
親子関係	.06	-.19**	-.01	.01	-.11	.06
教師関係	.13	.01	-.19**	.39***	.08	-.19**
R ²	.28***	.27***	.26***	.24***	.25***	.26***

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

尺度を目的変数、中学生版怒り尺度の各下位尺度をそれぞれ説明変数として、男女別に重回帰分析を行った (Table 6)。その結果、ACS-Jのすべての下位尺度において、男女とも有意な重相関係数を得た。

そこで、標準偏回帰係数について男女別に見てみる。まず男子においては、「友達関係」と「援助」、「欲求不満」と「攻撃」の間には有意な正の値が、「親子関係」と「援助」、「教師関係」と「抑制」との間には有意な負の値がそれぞれ示された (友達関係、 $\beta = .15$, $p < .05$; 欲求不満、 $\beta = .23$, $p < .01$; 親子関係、 $\beta = -.19$, $p < .01$; 教師関係、 $\beta = -.19$, $p < .01$)。男子の場合、「誰かに相談する」といった援助行動は、両親の言動が原因して生じる怒り喚起場面では用いられにくく、友達の言動が原因して生じる怒り喚起場面においてよく用いられる対処行動であると言える。つまり、男子は、友達の言動が原因して生じる怒り喚起場面では、友達に助けを求める傾向の強いことがわかった。また、「仕返しをする」といった攻撃行動は、自らの欲求が何らかの原因により阻止されるために生じる怒り喚起場面においてよく用いられる対処行動であると言える。

一方、女子においては、「欲求不満」と「抑制」、「教師関係」と「攻撃」との間には有意な正の値がそれぞれ示された (欲求不満、 $\beta = .15$, $p < .05$; 教師関係、 $\beta = .39$, $p < .001$)。女子の場合、自らの欲求が何らかの原因により阻止されるために生じる怒り喚起場面においては、男子と異なり「我慢する」といった抑制行動を取る傾向の強いことが明らかになった。また、「仕返しをす

る」といった攻撃行動は、教師の言動が原因して生じる怒り喚起場面において用いられやすいことが判明した。このことは、女子の方がより教師の言動に対して敏感で、納得のいかない教師の言動に対しては黙っていることなく、何らかの形で積極的に抗議行動に出る傾向が強いと言える。

以上の結果、怒り喚起場面によって、怒り対処様式をある程度説明できることが示された。また男女によって、怒り喚起場面における対処行動様式は異なることが判明した。Pulkinnen (1996) は、8歳、14歳、27歳までを追った縦断的研究において、男性は青年期に反抗などの外在的問題を示し、思春期以降に適応問題を抱えやすく、女性は、青年期に不安などの内在的問題、思春期以降に神経症傾向を示しやすいことを明らかにしている。このように、男女によって青年期に生じやすい問題傾向が異なっていることが、性別による対処行動の違いにつながっているのではないかと推測される。しかし、今後さらに対処行動に男女差が見られる原因について詳細に検討する必要があると考えられる。

結 論

本研究の結果、怒り喚起場面によっても、性別によっても用いられる怒り対処行動様式は異なることが明らかになった。すなわち、中学生は、怒り喚起場面ごとに怒り対処行動様式を使い分けている。このことは、中学生がどういった怒り喚起場面に遭遇しているかを見ることによって、ある程度、その後に起こるであろう行動を予測することができることを意味している。

そのような意味から、本研究によって開発されたACS-Jは、現代の中学生の生徒理解に役立つばかりではなく、今後、教師が学校現場でキレる子供達を未然に防ぐ手だてを探る意味からも、大変意義深いと思われる。

今後、さらに、発達段階に応じて怒り喚起場面における対処行動がどう変化していくのかを明らかにするとともに、青少年の怒り対処行動を生み出すメカニズムについて詳細に検討していきたいと考えている。

引用文献

- Folkman, S., Lazarus, R.S. 1985 If it changes it must be a process: A study of emotion and coping during three stages of a college examination. *Journal of Personality and Social Psychology*, **48**, 150-170.
- Folkman, S., Lazarus, R.S., Gruen, R.J., & Delongis, A 1986 Appraisal coping, health status and psychological symptoms. *Journal of Personality and Social Psychology*, **50**, 571-579.
- 藤井義久 2001 青少年の怒りの発現メカニズムに関する研究 平成11、12年度科学研究費(奨励研究A) 研究成果報告書
- Harburg E, Charpe J, Hauenstein L, Schull W, Schork M 1973 Socio-ecological stress, suppressed hostility, skin color, and black-white male blood pressure: Detroit *Psychosomatic Medicine*, 275-296.
- 神村栄一・海老原友香・佐藤健二・戸ヶ崎泰子・坂野雄二 1995 対処方略の三次元モデルの検討と新しい尺度(TAC-24)の作成 教育相談研究, **33**, 41-47.
- 小杉正太郎 1996 Lazarus, R.S.のコピーング定義の変遷とコピーング測定の問題 産業ストレス研究, **3**, 124-126.
- Lazarus, R.S. & Folkman, S 1984 *Stress, appraisal, and coping*. New York: Springer Publishing Copmany, Inc.
- 三浦正江・坂野雄二・上里一郎 1997 中学生用コピーング尺度短縮版の作成の試み 日本心理学会第61回大会発表論文集, 358.
- 岡安孝弘・嶋田洋徳・坂野雄二 1992 中学生用ストレス反応尺度の作成の試み 早稲田大学人間科学研究, **5**, 23-29.
- Parkes, K.R. 1984 Locus of control, cognitive appraisal, and coping in stressful episodes. *Journal of Personality and Social Psychology*, **46**, 655-668.
- Pulkinnen, L 1996 Proactive and reactive aggression in early adolescence as precursors to anti- and prosocial behavior in young adults. *Aggressive Behavior*, **22**, 241-257.
- Pearlin, L.I., & Schooler, C.. 1978 The structure of coping. *Journal of health and Social Behavior*, **19**, 2-21.
- 斉藤学 1999 子どもたちはなぜキレるのか 筑摩書房
- 斉藤良夫1993 日本の労働者のストレス解消行動に関する研究 日本の産業労働者のストレスと健康総合調査報告書その2 (ストレスの断面と追跡結果), 41-53.
- Spielberger, C.D., Johnson, E.H., Russell, S.F., Crane, R.J., Jacobs, G.A., & Worden, T.J. 1985 The experience and expression of anger: Construction and validation of an anger expression scale. In M.A. Cheney & R.H. Rosenman (Eds.) *Anger and hostility in cardiovascular and behavior disorders*. (pp.5-30) New York: McGraw-Hill/Hemisphere.
- 山口正二・荒井秀一・中村真也・田上不二夫 1994 中学生のストレスコピーングスキルと性格類型に関する研究 教育相談研究, **34**, 11-20.
- 山口正二・近藤肇・原野広太郎 1994 学校生活におけるストレスコピーングと性格特性の関連性に関する研究 教育相談研究, **32**, 9-18.
- Zeiner, M.. & Hammer, A. 1990 Life events

and coping resources as predictors of *Individual Differences*, **11**, 693-703.
symptoms in adolescents. *Personality and*